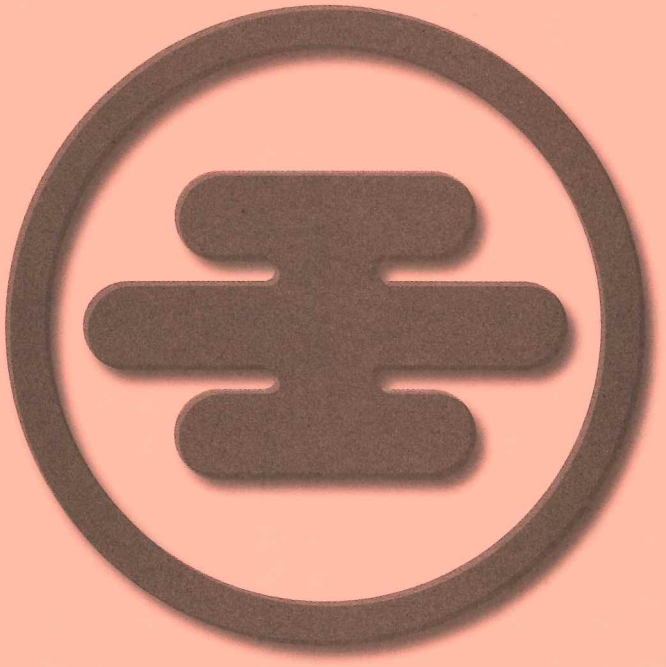
平成二十六年

十二月 自主公演能

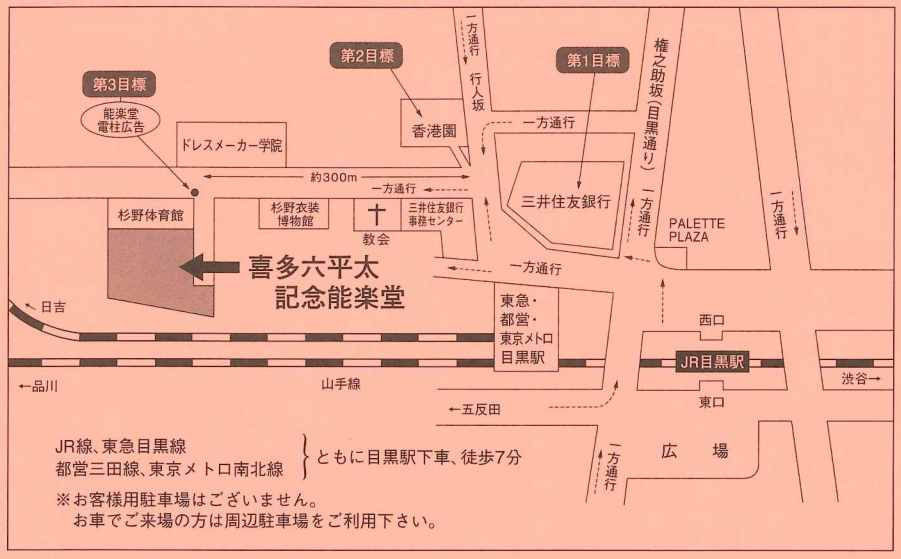
とき　平成二十六年十二月二十一日(日)正午始
〈整理券配布・十時三十分、
見所入場・十一時、解説・十一時十五分〉

ところ　十四世喜多六平太記念能楽堂



喜多流職分会

【会場案内図】



主催　喜多流職分会

後援　公益財団法人 十四世六平太記念財団

〒141-0021
東京都品川区上大崎四-六-九
十四世喜多六平太記念能楽堂

電　話（〇三）三四九一-八八一三
ファックス（〇三）三四九一-八九九九

《チケットのご案内》

十二月チケット発売開始日
平成二十六年十一月二十三日(日) 午前十時より

年間優待券

●十一枚綴り　五〇、〇〇〇円
●五枚綴り　二五、〇〇〇円
優待券は各職分でも受付をしております。

前売券

●一般券　六、〇〇〇円
●学生券　二、五〇〇円
●学生団体(二〇名以上) 二、〇〇〇円

指定席料　二、五〇〇円

当日券

●一般券　六、〇〇〇円
●学生券　二、五〇〇円

《お取扱い》

窓口とお電話にて承っております。
(FAX及びメールでのお申し込みはお受けしておりません。)

十四世喜多六平太記念能楽堂事務局
〈電話〉〇三―三四九一―八八一三
(午前十時～午後六時)

平成二十七年
喜多流職分会自主公演

千秋楽

◆平成二十七年三月二十二日(日)
一部　午後十二時～
二部　午後三時～
各部とも全席指定　五、〇〇〇円(通し券はございません)
※公演内容は喜多流職分各人による仕舞・謡となります。
※終演後、懇親会を予定しております。
※詳細は十二月頃となりますのでお問い合わせください。

平成十年に発足した喜多流職分会主催の自主公演能は、今回を以て一旦幕を閉じ、平成二十七年四月からは新しく「喜多流自主公演」を公益財団法人十四世六平太記念財団の主催にて発足させます。

十七年の長い間のご愛顧とご支援に深く感謝致しますとともに、新しく発足致します「喜多流自主公演」に倍旧のご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

喜多流職分会一同

【ご注意】

*喜多流職分会の許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はできません。また演能の妨げや他のお客様の迷惑になる行為もご遠慮ください。時計のアラームや携帯電話の電源は必ずお切りください。なお、迷惑行為を発見した場合や係員の指示に従っていただけない時は退場していただく事もございますのでご了承ください。
*2階ラウンジ以外でのご飲食は固くお断り致します。
*自主公演当日は午前10時30分より「整理券」(お一人様一枚)をお配りし、午前11時より整理券番号順に見所へ入場していただきます。
*チケットは入場前に半券を切り離すと無効になります。
*座席はお一人様一席です。入場の際手荷物等でお連れ様の座席を取り置く行為は固くお断り致します。
*公演日によっては、満席になり次第入場をお断りすることもございますので、あしからずご了承ください。
*公演中止の場合を除き、お申込後のチケットの払い戻し、変更、再発行はいたしません。
*やむを得ない都合により出演者が変更になることがございます。
*全館禁煙でございます。屋外喫煙所をご利用ください。
*お客様用駐車場はございません。お車でご来場の方は周辺駐車場をご利用ください。
*貴重品の管理には十分ご注意ください。館内で起きました盗難・紛失につきましては一切責任を負いかねます。

十二月自主公演番組

●平成二十六年十二月二十一日(日)正午始
●整理券配布・十時三十分、見所入場・十一時
解説・十一時十五分

能

俊成忠度

シテツレ・太刀持　佐藤　陽
シテツレ・藤原俊成　友枝真也
シテ・平忠度の霊　笠井　陸
ワキ・岡部六弥太　舘田善博
後見　粟谷幸雄　塩津哲生
大鼓　亀井洋佑
小鼓　住駒充彦
地謡　渡辺康喜　塩津圭介　高林呻二　佐藤寛泰　佐藤章雄　中村邦生　香川靖嗣　狩野了一
笛　寺井久八郎

休憩　二十分

狂言

福の神

シテ・福の神　三宅右矩
アド・参詣人　高澤祐介
小アド・参詣人　金田弘明

休憩　十分

能

龍田

後シテ・龍田姫
前シテ・巫女　佐々木宗生
ワキ・旅僧　宝生　閑
ワキツレ・従僧　殿田謙吉
ワキツレ・従僧　殿田進也
アイ・龍田の里人　高澤祐介
後見　高林白牛口二　松井　彬
地謡　谷　友矩　友枝雄人　粟谷浩之　大村　定　粟谷充雄　粟谷能夫　佐々木多門　金子敬一郎
大鼓　柿原弘和
小鼓　鵜澤洋太郎
太鼓　梶谷英樹
笛　松田弘之

仕舞

内田成信
狩野了一
長島　茂
金子敬一郎

草紙洗小町

友枝昭世

地謡

内田安信
金子匡一

能

項羽

シテツレ・虞氏の霊　大島輝久
後シテ・項羽の霊
前シテ・舟人　出雲康雅

ワキ・草刈男　則久英志
ワキツレ・同前　御厨誠吾
アイ・烏江の渡守　前田晃一

後見　谷友矩　谷大作
佐藤寛泰　長島茂
塩津圭介　粟谷明生
佐藤陽　内田成信

地謡

大鼓　大倉慶乃助
小鼓　森澤勇司

太鼓　三島元太郎
笛　一噌庸二

附祝言

（終了予定四時十分頃）

《俊成忠度（しゅんぜいただのり）》

一ノ谷の合戦で平忠度（薩摩守）は形勢不利になり陣を引きかけたところへ、岡部六弥太（武蔵の国の住人）が追いかけてきたので揉み合う。六弥太の郎党が忠度の右腕を肘から切り落とした時に忠度は最期だと思い、お経を唱えるが六弥太に背後から首を取られた。そして忠度の箙に「ゆき暮れて木のしたかげを宿とせば　花や今宵のあるじならまし」と書かれた短冊を見つけた。六弥太はこの短冊を、忠度の和歌の師である藤原俊成に届ける。すると忠度の霊が現れ、自分の詠歌を「千載集」の入集へ懇望したのに「読み人知らず」として収めた恨みを藤原俊成に述べる。俊成と忠度は歌物語をかわすが、やがて忠度の気色が変わり、修羅道の責めに苦しむ様を見せるが、それも去ると春の暁とともに木の間に姿は消えた。

《福の神（ふくのかみ）》

大晦日の夜に、参詣人の二人が福の神の神前に恒例の参詣をした。「福は内」と豆を持って囃し立てると、大きな笑い声をあげて福の神が現れる。福の神は二人の参詣をたいへん喜び、御神酒を所望し、早起き、慈悲、夫婦和合、隣人愛の徳を説き、謡い舞い、朗らかに笑って退場する。

《龍田（たつた）》

六十余州に経を納める旅の僧が大和より河内へ出るべく龍田川のほとりまでやってきた。折から紅葉の盛りで、川を渡って龍田明神へ参ろうとすると一人の巫女が現れ、「心なく川を渡りたもうな」とたしなめる。僧は「龍田川もみぢ乱れて流るめり　渡らば錦中や絶えなん」の歌を思い出すが、薄氷が張って立つ波も見えないから渡るのを許してほしいと言う。巫女は「これは御製（ぎょせい）で、藤原家隆の歌に『龍田川　もみぢを閉づる薄氷　渡らばそれも中や絶えなん』とある」と言い返す。巫女はやがて別の道から僧たちを明神へ案内し神木の紅葉について語り、自分が龍田姫であることを明かしてその身から光を放って社殿の中に消えていった。〈中入〉僧一行が龍田明神で通夜をしていると、神殿から龍田姫の神霊が現れ、「わが国劫初（こうしょ）より御代を守る天の御矛を守護する滝祭の神とは当社のこと」と明神の縁起を語り、龍田のもみじを愛で夜神楽を奏しながら天に昇っていくのであった。

《項羽（こうう）》

中国、烏合（うごう）の野辺の草刈男が秋草を刈って家路につくところ、ちょうど居合わせた老人の操る船に便船を乞う。船賃は要らないというので草刈達は舟に乗船、ゆっくりと舟は出るのだった。老人は露のしとどにおいた秋草の群れに夕月が宿るのを感慨深く見入っていた。やがて舟は対岸に着くと、草刈男一人を呼びとめ、あらためて船賃を所望した。船賃と云っても持っている草花を一本ほしいというのである。老人は草刈男が差し出した草花の束から、躊躇なく朱色の一本の花を抜き取る。その理由を尋ねると、「この花は楚の項羽妃、虞氏を弔ったところから生えた美人草だ」と言う。項羽が漢の高祖に七十余度連戦連勝したが、この烏合の戦いでは項羽の兵が皆心変わりをして利ならず、自分で自分の首をはねて果てたことを語り、自分が項羽の霊だと明かしあとを弔ってほしいと頼んで姿を消す。〈中入〉草刈男の夜の夢に、矛を持った項羽と虞美人の霊が在りし日の姿で現れ、四面楚歌の中、高楼に登って身を投げた虞氏との別れ、焦燥の苦戦と悲憤の自刃を再現して、最後の戦いの場面を見せて消えていくのであった。